KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT

無雜帖

13
6
3141

特
へ13
3141
6

蘆榮

柏子ハ竹右衛門が左りの手頭と見て驚き。ヤア此ハ何ぞと聞て露助へ。何ハ指がきれてあるゝと。我ハ知らぬと聞。竹右衛門ハこれを聞。汝ハいろ〳〵の癖ものゝ。我と誰大膽者観念せよと刀を拔首落さんと斬つる。露助くやく身をとり。一声さけびて力をきはめ。いましめの縄をゝと断土俵を把て受ゝるゝ。刀ハこれの土俵を斜に切おゝす。土ハ地上へ散乱を。時に不思議や許夛の蛙声ふり立て鳴ハ〻。竹右衛門いそがしく刀をあらためて。露助へ顧て竹右衛門何ぞハ猶豫をる。さく斬と名り髪をあげ刀をとりなをしたれば竹右衛門ハ刀を袖にもり。かゝし。頭をとられて

斬さるもかゝり斬たくもかし

誹諧の句をつゝて吟ぜんで。ものもしらぬ表ハとゝ名る乗物に乗ハ

声ありて

盗人を捕へて刀を我子に

と声さやかに吟じたる。竹右衛門は眉を顰ひそめ字を二つに斬たる。

表に人あり文字。今表に人あり。我分に附分の當意即妙。何人にや

ゆゑ。さよといひつゝ戸を開くに猶無物に声ありて不審いぶかりそれに

通て對面をぜーと。ひらて乗物の戸をさらりと立出るは五十歳計

の老女。女子。両刀を帯し武家の行儀や。摺箔の袷の衣に唐

錦の帯を正く首桶を小脇に抱てぞ〻〻と打通れば竹右衛門は一眼かくるを

大に驚き。こは毋人にこそ。我ゆゑ色

めりしやと。なほ怪しみ。席を払ひて上坐に通らるれば老女は戸口

に。我を毋しらるゝとは。他の変はいかなる

怒の涙とおとゝ〻。露助はせたる面色。妻旅関に駭眼

もとれたるとぞ。ゝ持る菓苞の裏より両刀を取出し一腰は

夫に渡し。一腰はおのれ小脇に。夫婦ともに竹右衛門が右左

に立ならび。そろ打ぬけて且露助は夫土に金鉄の精を貪るゆゑ

名剣土中に入て其精天に徹しとぞ。傳聞蛙鳴丸とは名剣鉄精

を育る土を斬しに。迫て蛙の声を発するは。汝今土俵を斬し

刀こそ。蛙鳴丸に疑ひ。其刀を呀持る汝は去年五月下旬鎌倉

月影ヶ谷の下館の後門にて。都に白拍子と手に手を引て逃れ去し

曲者に疑ひ。其時我其処に行ひ。前に流とせたる土俵を

斬。汝が刀を受しに。今の如く土と斬。忽蛙の声を発せ。ゝ傳聞

蛙鳴丸とぞ。ゝと推量せり。其夜の様子は汝が心に思ひあらんと

ゝて。於関も其尾ふつきそいひくるゝ。ちうのゝうどと都が死骸をあらこあ
見れば口の裏ふ小指を含。今汝が左りの手頭と見るふ小指ゆ。彼と
いへ是しるし。都を害せしハ汝なる支明白なり。露助又いひくるハ。かくゝ
我ハ都が為ふ弟なり。前程の怪しきもしきしく姉の亡霊ぞ。時烏
血を吐明障子ふおとてこひしと書るも。姉の怨魂冥途の鳥と
なり。汝を打しめんと我を此ふ道案しるふ疑なし。蛙鳴ゐと所持する
者こそ姉の敵なれとおのれ。其時蛍の光そかのふ見てる汝が面体
のしやそれとおのれ。いろいろそ癖なり。五十両の金の入用ありと
いひて試るふ。我活首を質物ふとらんとそもいづしくれど。其詞ま
ちこひて金を借しハ。此家ふ入こそなれ実否とてせらん。汝が首と
此方へ受取姉の仇を報んなり。素入用なる金なれど封の侭此ま

あり。此金を矢ぶくへハ露なりとも恩ハなしく。ひつく懐しろ金のもど
取出して。竹右衛門が前ふあり。日来尋しし姉の敵如此明白なれ。
いざ立合て勝負を決せよと。いひて刀の目釘をとり。於関りろもも
諧寄しろ。時ふ彼老女夫婦ふ向ひやうよまそいふこと有さそハ
其方ハ都が所縁の者なり。勝負を急ハ支れど。此方ふも別ま
又金義なき支あれど。まづしの間ひくへて居よとこそ置懐中
より印籠を取出して。竹右衛門が目前ふ出し。汝此品ふあるハん。
去年都が殺れし同日同夜下館の軍用金千両を奪取し其盗
賊一重の塀を切破て出る様子。我其処へ行くも。拾ひ取る
此印籠。決地ふ遠山の蒔絵しるハ。ゆ持の品えんくく
ゆ人そそ聞しふ。汝千両まて五条坂の遊君と身受せしと

いふ時彼しるし是しるし。彼金の盗賊は汝なる支明白なり。それを都は見
こがめられて手ふりけるるふ疑ひ。我君しるしの金の盗賊すべふ都と害
せー者と貪義せよと。夫庄司しのふ命ぜしる其役ふ妾ふし
ゆえ。夫ふりて鎌倉と旅立汝ダ行方を探りやうく此栖ふ今日
尋當アしも。人手ふりけど此母ダ手づく汝ダ首と打て父御乃恥を
もくぐやと。それゆるふ此首桶現在しるの此母ダ此役めをまぬく
望て我子の首を打しるふ。鎌倉しるるくと。尋て来る心の裏。
やうにおらふとおりふぞ。斬しるもあり斬たくもあるとの。難白ふ附しる
我一句。盗人と捕へて見れば我
十七文字此母ハ盗せよしハ産つけるぞ。渦しても盗泉の水と飲
熱されども悪木の陰ふ息とるふ教戒と。知ぬ汝ふあるざれしし

しるるいど大魔の足入しるるふ。涙や。不忠者不孝ふ如と言て乃
手弱腕ふて。襟首とりて捻倒し。扇を把て打擲しるる怒の涙ふ泣
身とりえてそ倒れる。露助ハ不諾寄て。妻都と殺せしるる
恨ありそうと解ぜぬーふ老母の今の物語と聞て合點ふ。
しる罪科も。此方の恨ハ妻の仇。ぞ立むいざくと。夫婦ゆるる
えげし足言老女ハふるびたりけてやよ待たぐ。彼ダ口より盗賊ありと
白狀と聞しるるて。其方等ふ仇打の勝負ぞ。首ハ妻ダ
受しるる移。主人ゆるたまるる此首桶の中ふ此方の役めと
しるるぬ。ぞ児子白狀せよいふくと詞の責具行方御門ハ最前
より唯手と又き頭と低不言して居しるる。やうくと顔をあげ。
母人ぞふお聞あれ。夫婦の者も我いふしる心とぞあるそうく聞と

坐をあらしめ威儀を敬ひいたりたり。我本心をあらはして夫婦の者は
打ひなやましきしが。母人のもん疑をくるる餘儀なく実を語りぬ。
若殿王兎君白拍子都が艶色に迷ひあまて。放佚無慙のもん行跡
親入と始館中の老臣くるるく諫を尽し理をきわめて諫言を奉れ
どもん聞入ず。悪行益つのりぬ。お家の滅亡あやうしと諸臣こうな
薄氷を履如くおりをりをけるなり。我浪人の身を幸に西施莫湖
が沈楊貴妃を馬嵬が殺せ例かをしへ。主君放埒の病根を絶度しと
おりひつる。罪なき者を手かるる悲なく。殺ふ者のびどしらるも。家の
滅亡大勢の歎ふかるるれぞと心を決し。去年の五月鎌倉ふりてう。
下館のめぐりを徘徊せし折ゝ續く五月雨しきりに降る陰
身をひそめて居る所ふ黒装束のものびの者館の塀ども

ゆゑ曲者ぞと呼ばるふ小柄の小刀手裏剣を打つけて。跡をくらま
辿去ぬ程なくかの都乗物を出来しぬる。従者を追散し。都を乗せて
不言ど心の裏をおりひるる。後日ふ汝が所縁をたづね此身を打れて
修羅の苦患を救べしと誓ひとりてしるのかをつぬたし。彼若痛
を塔ざりしや。我小指を食切ぬ時しも燕子花の盛ふて都が血を流
れたるて。燕子花のゆるの色を紅ふ染うえしが。都が怨魂燕子花ふを
まりしまや。彼花の裏ふ一團の陰花燃出都が胸りをり一羽の時鳥
飛出てあるーしぶふ鳴去ぬ其時行ちびしる旅人ハ我推量にぶ
露助汝をあり名る。我都を手かけし後此庭の四季咲の燕子花。
毎月上十五日ハ花枯凋下十五日ハ花咲て我又上十五日ハ常の如く
名れども下十五日ハ瘧病をぞ煩う。夜ゆく都が亡霊来りて我を悩

ゆゑ。寐食しをふるべしと。如此痩衰活ゑ〻餓鬼道の苦とうくる
なり。彼罪をくゆして及ふかを死し[illegible]。くまねもくべくとゝ。一日もとゝ
彼が所縁の者ゑ打きて恨をとゝ成仏とゝとゝやと。所縁の者と尋る
ゝ露助汝が面体都がおもざしゑ似ゝゆゑ。都が血をたの者かと
心を付しに。金をくて命ゑかくる支ありしと。夫婦ゝ歎しゝふ支とゝ。
れゑ就て実否を探を試ばやとゝ。活首を質入せど。金をかし
つゝくゝんと。けざと難題をとゝかしゑ。速ゑゝくべくゝゝゝゆゑさてゝそ
一物ありと知。無分別ゝ置所露ゝゝ実の露助が。露の隼の質物
も。我ゝ風雅のゝ物。ゝと情をくわして。燈臺ゝゝ辱めて。側
近くつかしも。怒を起さ也其実を探んゝあり。又新貝の刀と偽りと。上唱
九の奇特をくしも。汝ゑ我を疑ゝ。汝が素姓とゝくんゝふせ

今日時いゝりて恨をゝくしゝ。葉子花の所縁の色の汝等が素性を
知も正是都がゝくべく所をゝん。昔軽大臣遣唐使ゑ渡ゝ。
支那の人不言藥を飲ゝて癒ゝ身を彩畫頭ゑ燈臺を
戴しゝて火を燃しゝ。れを名て燈臺鬼ゝゝ。其子鄙宰相支那ゑ
往て父を尋ぬゝども。姿変ゝれば面を並て知ざゝ燈臺鬼
涙を流しゝて。指頭を食切血を出して詩を書。れによりて其父ゝ
支を知ゝゝ。汝癡ゝゝて我をあざむく。我汝を燈臺ゝ。
時烏血を吐おそゝしゝゝ文字を書て姉の霊ゝゝと
ゝ。都是軽の大臣灯臺鬼の昔語ゝゝ似ゝ。汝ゝゝ者を
苦めて。姉の敵を打んとおゝふい下郎ゑ似ざる懐心義心感ゝる
ゑゝあゝゝあり。毋沙のゝゝしき謂ハくの通ゝ。其夜毋人ゑゝ

あれしとて露もうらむ。我幼年の時より持てなれたる此印籠。其所ゝ落あり。ゆゑゝ軍用金を奪ひしも拙者ゝ業なりしと疑ひ無理なるべし。拙者ゝ詞露計も虚言なる証拠とまうす。此小柄の小刀ゝいしてさし出しぬ

十　紫の蛛もあり〻池辺の盗人

當時老母小柄の小刀とうけとり。つ〻〻見そいなるは。是はこれ数年色繪の彫物細工の妙なるものなるぞ。其盗賊ゝ此小刀と手裏剣ゝ打しとなる。さいつ夏まあるまじ此ゝあるべしと。さてど忠義なおのゝ者ゝ。千両なる大金と出し。五条坂の阿曽比吾妻一ゝと愛人出しとゝいふゆゑぞ。奪いて軍用金の千両と。阿曽比とおのゝ千両ゝ。符合なるゝ疑あり。浪人の身と以て千両なる大

いなりて貯しぞ。又汝十六年以前剃髪の望のゝ昼置て出奔なる身とゆゑて今ゝ剃髪とぞ。浪人ゝ似たるゝ業なれ家宅の結構衣服調度ゝ美麗と尽をこれ以て不審ゝ実ゝ。遊君吾妻と身受ゝ謂あり。元来拙者ゝ初一念とこれ語て聞せ意趣なるべし。汝ゝ縦領なる妻後妻とまうす。其恩甚深し。必餘吾郎と麁略ゝ遺言ゝ子なり。我ゝ本妻の産餘吾郎ゝ第なれども本妻の産なれ母人乃詞ゝ我原嬖女の時汝と産なれば。汝ゝ縦領なる妻後妻とまうす。其恩甚深し。必餘吾郎と麁略ゝ遺言ゝ家の娘なれば。実ゝ家の血なれば餘吾郎なる養子なり。餘吾郎ゝ實母ゝ山咲の

おのれ父子かまうし。家督は餘吾郎に譲めん。拙者は別家をせんと願ひ給へども。総領とあき次男は家を續ぐき理やある。これ順義なあらじとのまをせうけかたくあ、さりしかども。やむことを得ざる出奔せし。餘吾郎は家督とうけたまはれば。ちろしかと如く出者はしりて歌学を好まれゆゑ。家を出で後うれ蛍雪の功を積て古今伝受と相續し。歌学を教て世を過を手着しし。貴人富家ふも貴子色それゆゑ。ちろづふ不足なるふ。餘吾郎五条坂の吾妻しし門曽比に相馴てつひふ行方をしらざりしるし。然則は我存念も水の泡家を續べき子なくて。出奔する我まそし。これて不孝なる道理なれど。且餘吾郎に行方を尋ねやと五条坂に到て聞しに。其在所を知者ありてとうに。吾妻は餘吾郎と暮しあるじの長の意ふ背き雪責めせられて命もあやうしと聞しゆゑ。若吾妻餘吾郎が為ふあらぬ死をあしては餘吾郎が罪を増道理と存し。おのれあやしけるる姿ふ打扮て。富士屋の後園ふ忍び入。身代千両を殘しあき。吾妻を奪出し。餘吾郎が栖の門外ふ捨置て飯り。翌日又五条坂ふ到彼長ふ對面。吾妻が年季の証書を取戻しぬ。表向ふ彼と身受いてはは餘吾郎が放埒ふ世ふ廣く聞え。飯盛の妨ふなるべしと。それといふて表ふ出ふ身代千両も一富家ふ古今傳授をいつしたる謝物の金ふ。彼と身受の証書ふ拙者が本名をあらいして。餘吾郎が名をかくしゆゑ今五条坂の小歌ふも。吾妻うけだと山咲餘字兵衛とうふと聞唯此うふ

餘吾郎が一功を立てさせ給ふ。飯森と申す父子の者心とやさしき願ひ申す。田人さま此儀を祈り奉ると。心底とくとくしく物語れば。母は感涙をおとす。今は疑ふべきやうもなし。義理ある子の餘吾郎が家を續せたく思ふは我も又祈ての願ひ。いとど申して母子ともに心の合はせも不思議なりと。心をけする物語を聞て驚く露助。くるゝ下つぼを手をつく。さてあるべき餘吾郎さまのあん兄君がいらしゃを行右衛門うち點頭いふもさあり。幻竹右衛門といふは後の変名。實の名は山咲餘字兵衛。それがあるとは我實田淀瀬とやもうす。長物語ふ時刻をうぬいざ夫婦りろくと我を打て都が手向よ。らく〳〵打と覚悟の体露助は頭を低今のあん物語をうけたまはれた。姉都を手が懸るべし。原忠義なる者がふうれし。夏がいとう恨むべき理あり。

殊更主人が双向剣のあるべきやとは。餘字兵衛いふ。何ぞ我をさして今更が主人とは何ぞ。汝がが我奴僕とはつれ。それは原仇と報んの為の計畧なれば我は主人が似て主人なり。露助いふ。其儀不審は理あり。拙者去秋姉の敵を尋るとて鎌倉へ下る。あん父山咲庄司さまの僕なり。名を路平とやせり。鎌倉へ其敵あれいざと乞受。又れたおるね夏のおれたる。雨といふ字の笠を着て。露助と名をあらため。此村末がうり住ぬ去年十月ちれる儀母君の命がうり。餘吾郎君の儀安否を聞ふる。京都へ飛脚に参りも。侍女裏乃取次がて。拙者は新参なれば奴僕の身なれば。あん田君のあん顔を見奉り夏もなく。拙者ゞ面はうれ更がもん見知わるべうるど

絶の間ふ入へる拙者なれた。餘字兵衛父君ふ仕へ
則陽主人ちゝぬ支ゝそ最前よりの無禮の儀をひゝふ免し
められと。身を轉てぬゞけた。餘字兵衛ハ打驚さそハ志う
あるる。父ふ仕へ者なゞ。我を打ともいひゞゝ。さゆゝなゞら
所縁の者ふ打るべゝと。都ふ誓ゝ言を遂終。彼恨をゝゝ
もまたいふもゞきと思案の体於関ハ竦ヒもゝみ出。唯今乃
其小柄妾ふ一目見せよと。いひてこれを取てつゝくゞめ
いと驚るおりちゆそこゝ是放駒の色繻の彫物裏ふ二見の
二字を鐫。是ハ妾ゞ目おゞえある物ゝそ。兄棘松ゞ所持の小柄ゝ
疑ゝ。さてハ彼千両の賊ハ妾ゞ兄ゝそゝゞゝといひて出の
やうゝる息をつき。面目なげふうつむけた露助もうち驚き。何と

ふ其小柄ハ汝ゞ兄の所持の物ゝや。そゝ其跡と物がれといそゞ
もしば於関いゝく今まを連ちふ身ふ妾ゞ素性を語られを
知ゝまゝし。妾ゞ父ハ伊勢國の樂人ゝそ。工見太夫是次といふし
者田ハ於破矢とまゝせゝゞ田十五歳の時男子を産幼名を棘松
といふ其後連て女子二人を産其一人ハ妾ふて今一人ハ則妾ゞ
妹幼名を小蝶といふ二人ともふ幼時ゝゝくふ他家へ去兄のゝ家
ふありゝゞ。兄ハ身持わゝく勘當をうけて行方ゝゝれゞ其後父ハ
亡人の数ふ入田ハ妹の小蝶を連子ふして。鎌倉ふ動の駕籠乃
塵矢衛といふ人ふ再縁とゝゝる。七年以前其塵矢衛ゝの一人
族人の忘れ金をあゞりゝゝふ其夜盗人ふ其金を奪し
分説ゝ。其急難を救ふ。妹小蝶ハ手越の里ふ身を賣ふ

五条坂へ賣りてくらしゆく。彼富士屋の吾妻こゝに入て則妹の小蝶なり。去年おん身鎌倉ふ奉公の留主の間朝夕の手着にて歌占をなりわいと五条坂ふゆきて妹吾妻ふあひ委敷を聞きそりぬ。兄の行方へ今ふもんさんしども此小柄ハ父の秘藏せし物にて。父存生の時兄ふ讓りと開バ兄ゆゑ持べき物にあらぬ故ふ彼盗賊ハ兄にきはまりひと語りたれど。露助いゝたれを聞今あらぬ汝ふいしゐをつゝと。夫婦の縁ハくれまをゆる。其ゆゑハ賊人の妹を妻ふ持て。盗泉の水をもふ飲白波の立田の山ま共ふ入ておすぐうぐーの名を汚とそゞまでなり必我と恨ゑしらるば。於関ハ涙と流まゝのまゝ無理ゆゑと。悪人と兄ふ持ゆが我身のあしき宿世ゆれバいそぐもん身を恨べきとしん終て。一腰を抜放らかどく自害とゆゑふ

久世詞考大四

久世詞考大四

ゆ。前程ゆゑ門外ふ彷徨て様子を窺。箇の武士やよくやまくまそと声かけて走り入於関が自害の手をとゞむ。於関ハ涙ふ此人の顔をつゝくゆゑ。ゆのふ見おぼえある顔ありとゆゑ。うち點頭さゞあらん今更名告も面目なしとゆひもたゞカを抜て腹かき出し突立れた。皆くこゝもいふゝゆひて驚きぬ。彼武士ハいと苦げよ息をつき。餘字兵衛と申ふ親子ハ更なり。露助ハ對面ゆるハ今がたゞめ。拙者ハ則これなる女の兄前の名ハ二見鍊松今の名ハ鮒尾賀堂左衛門とゆゑ者我富士屋の吾妻ふ執心深く。今餘吾郎が妻とゆゑし嫉おりん。朝烏の刀を買取。それを媒鳥とゆて吾妻とゆゑけ。餘吾郎を誘き。偽の刀とゆて去状を取吾妻を嫌し出して我隠家ふ連飯しに。吾妻が我ふ靡ゆる体とゆゑハ。

刀と手ふ入人為の計必て我ふ油断とさを真の朝烏の刀と去状と奪て逃出しゆ名。まもとく嫉怒ふせまりの餘吾郎のみも打捨んと彼所へ急ぐ道をぐ。此処と過しに此ふ吾妻が嘗あれを何支ふや

と彷徨て委細と聞うち。妹於関が自害の様子と見るふ志のひどとぐ。これふつきて我身の懺悔ぢん聞あれ我志あ〜きゆ名ふ父乃勘當と受其後漸ヒふ零落して遂ふ野ぶせりの乞食ぐ鎌倉と徘徊せ〜が小動の駕籠の塵兵衛〜ふ者旅人の忘〜財布の金とあ〜ふ居ふ垣のひまふ窺見て其夜塵兵衛が家ふ忍び入其金と奪ひ出んとす〜が。十四歳ぢりなる娘の寝顔せふ〜ふまらく見んとれ頻ふ婿媛の心と動〜殘る逃出〜ぶ彼の奪る金七十両ふて衣服腰刀ぐ都ふのがりてちらく彼地と

徘徊せ〜ふ。偶五条坂ふ到阿嘗比等の人と見物せ〜ふ其うちふかの塵兵衛が娘あり。前ふ比ふ十分の美色とあり。其名と聞バ富士屋の吾妻とふ。彼阿曽比〜れぞ我望ふを

ぐふふ安〜と喜〜く思て富士屋ふ到る。吾妻と揚てまくらえんことを望度々かきくどくとものぐ。彼我とく嫌て一夜の枕もやるさぐれをまもとく心をあもち。何ふまれ金おかるでハと悪念増長まして。再又鎌倉の下て。月影小谷の軍用金千両と奪取盗賊其放駒の小柄のぬ〜ふ則是拙者なり。其後我吾妻が為ふ金銀と瓦石の如くもれぐ兎角雖ざれど。寧かれが身と贖出ふ思ふおもひかの千金と用んとおもひ〜ふ。雪の夜行方もれぐとなる今門外よりて此妹が物語と聞バ。かの塵兵衛が娘ハ我妹の小蝶ゆそ。我かの

金を奪ひゆきぬ。其金のくりふ身と賣て。吾妻とりよ阿曾比とる邑物語夫しゝ知ど我ハ又其金と吾妻が爲ふつゝ捨しも。皆是悪の報うゝん。去のゝうゝだ塵兵衛と。現在母の後夫とりゝん。母にも面を合さゞれ。彼所ふ居しゝ露おりゝど。妹小蝶ハ幼時他へつゝ一おきゝゝ素たゞひふ顔と見ちゝゝ。ちゝぬこゝゝいひゝゝ。同胞の妹を意墓種ゝ泉悪と意しゝ。豈天罰とまぬゝゝ。我とゝみ嫌一夜の桃もゆゝさゝ。今ゝゝ。我幸ひ少て。富生道ふおちいゝこゝ脱しゝ。めゝ因果ふ小車の不孝の罪の火ゝ車。それふ引ゝゝ二人乃妹ハ。孝もあり貞もあり。彼等ふちゝて年来の悪念と。今一時ふ轉て。善ふ到一此自殺。こゝゝそれと名告て出。懺悔ふ罪を滅しく死。抄。ゝて来ハとゝゝゝゝゝ。云終て於関ふむひゝて。妹今更て

兄身の縁と断しゝそれ露助於関ハ我と見身ゝ孫ゝ。ゝの名ハ汚ゝ。ゝの如くふ連ゝ。又別ふいゝことあり。奪ゝるかの千両の半ハ其侭船岡村の我隠家ふ残しあり。和主ゝゝかのゝん館ふ返しゝ。よゝのむゝと意残して。刀ふ手と無きゝゝと引ゝゝ。於関ハ苦痛を見るふ堪ず悲歎の涙ふむせゝゝ。強氣の堂左衛門。刀と投捨かの土壇ふ這寄て。こゝゝ我襟髪とゝきあげて。いざゝ餘字兵衛しの軍用金の盗賊と成敗しゝ。おん身のあゝを立ゝ。しゝゝ。餘字兵衛目をちゝゝ。都ゝゝあふ打ゝゝ。義理出来ゝ。ゝゝゝゝて懐ふ入鶏鳥と手にゝゝ。ゝゝ世の捉ハせんとゝゝ。南無阿弥陀仏と声かゝゝふ首打おゝせん。於関ハ軀ふしゝつきて声と放て泣さゝ。老母淀瀬も露助も。暗ユ

落涙もさることなり。かくて餘字兵衛堂左衛門が首を取上て露助に對
我此首を受おさめしるしを汝が首の質物に其代返しつるとなり
しかるに。質物の証書を投与へ前程返せ。此五十両の金は堂左衛門が
とりし料かつるなり。金の包を於関に与へ。さて堂左衛門が首を
彼小柄の小刀をさしつるなり。首桶に載て毋の前にさし出しいざ軍用
金の盗賊の首を受取べしとて。老毋はうち點頭此首を
受とれば。我うけしまる役目もなし。彼去の紙つく五月雨よ汝が
着る濡衣も今ぬぎ捨てわきまえありとて喜べば餘字兵衛
露助に。我曽て剃髪の望あり。都が為に打るべき
心あらば汝がいまざこれを遂ん。今汝が刀をて我髻を
都が恨をきるべし。毋人さん家督の儀は餘五郎に續しめ

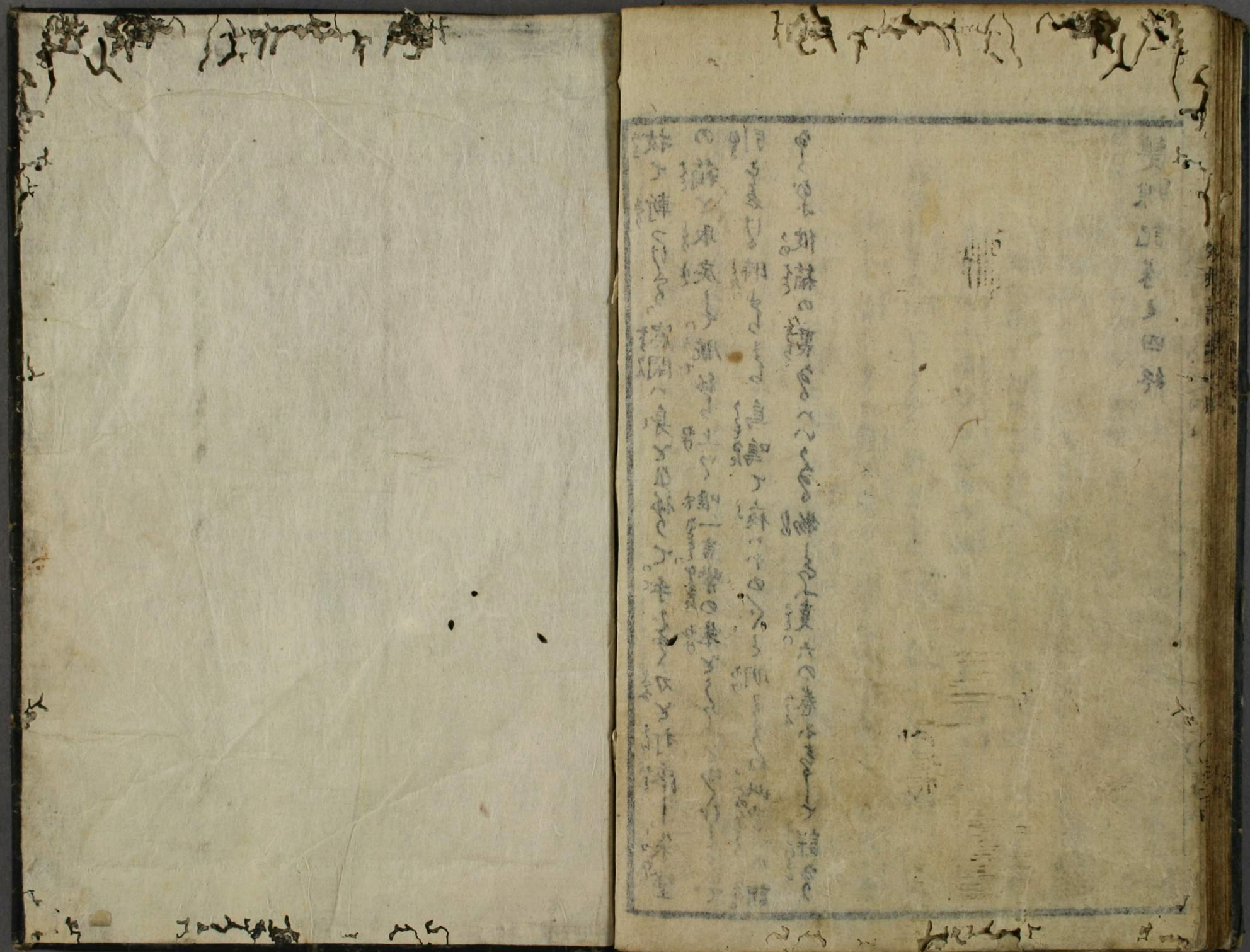
拙者は剃髪をゆるし免しいのちを
露助が刀をて髻をきりとる。今より祖父の法名海閑の一字を
とりて。山咲窓閑と名を更め。神祇釈教・無常を狂言綺語
とりて誹諧の連歌と一流を讃佛乗の因とすべし。都が
菩提のためにとて終て片手に手燭片手に斬る髻を
握て。庭下駄を踏ならして。赤石ぶの池に臨手燭をわけて水鏡
に面をうつし。嗚呼病に我身。見てふたりに衰ふ
窓閑が姿を見れば鬼
と口をそろへるが。再又一陳の風おろし来て。庭木の梢を吹かし。
池水皺して愁が如し。怨紫藪の花揺動して一道の炎火閃と
燃上れた。手燭を撲地取おとして又ひ出を瘧病に身上

まてき足軟てうち倭僧と踏しめて。吐息さへも苦げそ。炎火よりひ
のまんとたれど夏の澤水
とたらふ服白を吟じ。恨とうとして成仏せよ。南無阿弥陀仏と
らえて。手ふ持る髻を池水ふ投入れ。又葉子花ゆらくと動て
花の裏ふ紫雲を生じ。鬟鬟として空ふ上るのびさ。一羽の時鳥飛
出て一声鳴て光を放て西の空ふ去ぬ。此時窻閑ゲ胸中忽朗
ふなりて。病ゝ頓ふ癒ふる。是都ゲ怨霊窻閑ゲ一分の妙ふ感伏し
恨とうとして得脱し。成仏まるふ疑なし。露助於関愁ひの中ふ
喜びと交えり。鬼神の心ども感ぜ。ゆるしるるべし。
窻閑又西ふむかひ。あん聞おびもりべし。主君判官の侍秘蔵ふ二振
の剣あり。其一振ふ小鳥ふ変じて朝鳥と名付しこれ日中乃

鳥ふ変じて陽の太刀なり。今一振ふ此蛙鳴丸あて。アアア月中の
蟾蜍ふ変じて陰の太刀なり。おのれ少年の時主君より拝領の剣なれ
ば。ゆく姿とゆえて隠者とされで用べき所なり。これと餘吾郎ふつれ
されさされ〜〜〜〜てき〜出せで母ふ益感歎を。ひるる折しも門外ふ
あん迎ひとうじて。淀瀬ゲ従者等提燈把て来アれど老母ふ
首楯と蛙鳴丸と携て立上ア。我ふ一旦旅宿ふ飯る。さらばくと別を告
まづくと歩出て。乗物ふうつれる。窓閑露助於関もとふ門
おうを。此時露助南方十字兵衛ゲ忠死のことと語らざるべ。これを
語まば十字兵衛ゲうるぎを失理あれば。うるべ〜さるべ。短夜
うれば。ゆ暁ふ近るべし。夜の明ぬ間と窓閑ふ露助於関ふ下知
とす。空櫃と假の棺とて。堂左衛門ゲ軀をうさる。色彩びしる

二人の僕とこゝに醒して擔ひもたる露助夫婦は左右ふを入鳥辺野にさして出去ぬ。窓閑は其跡をとゝおかずて

袖白妙の夜もすがらくゝあるものの朝紫の
杜若の花も恰の心ひらけて。今こそ草木國土もゝや今こそ
草木國土。悉皆成仏の法を得てこそ。失ふれ

と謡曲杜若の切をうたふつゝ。歎息して一間の裏ふ入ふ。時ふ又池のあなたの籔ヒと音して。葉子花の去りあひる裏まで衣服は更ふ。覆面頭巾。九縫の帯。手覆裏脚ふ至まで。都て一様の紫ふ打扮するものゝの由者あるゝ出て四辺をうかゝ抜足して。亭坐敷ふのゞりゆきて。彼処ふあるゝ朱塗の手箱を奪取身を轉して出んとて窓閑は奥の間ふ出来たれとゝ呼戻せど。曲者は刀を抜て斬つけるゝ。窓閑は身をひ移りて。手ゞ刀を打落して朱塗の箱を取戻して脇ふ抱ち上ゝ唯一言紫の朱をうゞとゝ引ゝ抜ける時ふ鳥鳴て俺はかのゞと明るぬ此時の謂あるゝ彼箱の裏ふいうる物ふ文六の巻ふ詳

雙蝶記巻之四終